

右左口宿の道祖神 常夜灯と道標

右左口周辺地図

「浜」の標識●

●曽根丘陵

中央自動車道

県立考古博物館●

甲府

厄除け地蔵

大津宮原観音」「左 と下宿の交差点に着く。 と刻まれた道標も置かれてい 交差点をさらに直進し坂道を 「厄除け地蔵」 が鎮座し、 市川文珠御 信号の脇

中道南小学校に出る。 を越えそれを下りきったところで と道は右に大きく曲がりながら丘 祀られていた。さらに足を進める 像に三猿と二鳥を配した庚申塔が 脇の塚には石祠、石灯ろう、 左手に丸石を祀った道祖神があり、 に歩いて行き、 て坂道を下ると上向山の集落に入 小学校を左折し、 合流地点にある庚申塔を左にみ 住宅の軒下を潜るよう 北庚申橋を渡った しばらく歩く 金剛

め入った北条氏を破り再び右その後、家康は甲斐の国に攻 智光秀に討たれることになる。

れる。 宿の仮御殿に宿をとったとさ 時には生活と文化を運ぶ道路 抜ける右左口宿ではあるが、 左口峠を越え甲府盆地に入り 信長のために造られた右左口 として四百年以上の時を刻ん 歩けば十五分程で通り

歴史を伝えている 夜灯そして道標が 脇には道祖神や常 ら数分歩くと左手 らもう一つの旧 下宿の交差点か この道の 右左口宿 その

四方を山に囲

まれた甲斐の国と

駿河の海を最短で結んだ

中道往還、多くの旅人や商 人で賑わった右左口宿は 今、人々の生活の中で 静かに時を

橋からここまではゆっくり歩いて

分程度の道のりであった。

高架下には「右

右左口・精進

かれるが、今回は右手の道、上向旧道はここから右と左の二手に分

山地区を経て右左口宿に至る道を

程で旧道は再び新道に合流する。

させてくれる。

約一キロメ

堀ノ内・寺尾」

と書かれた

その道標を

央自動車道の高架下に出る。

中道

続く山道はどこか懐かしさを感じ

車の騒音から離れて雑木林と畑の

ている一里塚公民館を通り過ぎ中

に歩き、

道祖神や六地蔵が祀られ

機があり旧道は右手を上っていく

し五分余り歩くと、

間門の信号

越えていく。住宅の間を縫うよう

に沿って左折し、最初の橋で川を

新道を少し歩くと旧道は芋沢川

になる。

県立考古博物館東の交差点を左

に伝えている。

着き場や河岸であったことを微か

ここから県立考古博物館東の交差

を過ぎると旧道は新道に合流する

点までは新道を十分程度歩くこと

立てられた「浜」と書かれた標識

その昔この地域が渡し船の船

をゆっくりと道なりに進んで行く 起点に最近整備された真新しい道

ろに「上曽根の一

里塚」

がある。

右手にみて直進し

右折したとこ

数分で新道に交わる。

傍らに

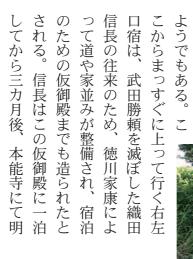
と根元に置かれた石祠が往還の証 甲府空襲で傷ついたとされる大木

のようにたたずんでいる。

みた。

県道甲府・精進湖線の中道橋を

る中道橋から右左口宿まで歩いて 回はその中道往還を笛吹川に架か



笛吹川

境川

右左口宿に残る徳川家康御殿場跡 往時の一 が途切れ、 に伝えているよう に思える。

瓦に徳

家並み

口郷は骨壺の底にゆられて吾が帰かれた歌碑には「ふるさとの右左 寺を過ぎ数分歩くと、放浪の歌人 山崎方代」 の生家跡があり、 宝蔵倉のある敬泉 川家の家紋である が刻まれた

る村」と刻まれていた。

宿を抜け、広くなった道を数分 左手に曲がる道と直進し

> である。 の道は、 らわずか先で通行不能となって る細い道が右左口峠に向 今静かな眠りに入ろうとして は、新たな道にその役割を託人々の往来が途絶えた峠越え 残念ながら旧道はここかどが右左口峠に向かう旧道 い道に分かれる。

の家並みが残り、

面影を微か

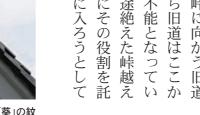
た間口

1が四間二尺3り整備され

(約七・七メー



敬泉寺入口に建つ、宝蔵倉の瓦に刻まれた「葵」の紋



一里塚公民館の六地蔵

甲府市/中道往還(右左口宿)

り翌朝には甲府に運ばれ、

生魚と

して食されていたそうである。

駿河湾でとれた魚はこの道をたど 道往還と呼ばれていた道である。 路の中間を通っていたことから中

左口路は、東の御坂路、西の河内

を最短距離で結んでいた右の昔、甲斐の国と駿河の国